



Title	近代日本の海外美術品の仲介者と場
Author(s)	山本, 真紗子
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本の海外美術品の仲介者と場

山本 真紗子 日本学術振興会特別研究員 (RPD)

先行研究と本発表の視点・問題関心

本発表は、美術商「山中商会」が日本国内で展開した事業、とくに東アジア（中国・朝鮮・日本）以外の国・地域的美術品を取り扱った展覧会事業を史料を用いて具体的に明らかにし、西洋美術（作品現物）の日本への将来や展示の場がどのように展開したか、という問題の検討材料を提供しようとするものである。

山中商会 (Yamanaka & Co.) は大阪の茶道具商・山中簪堂 (山中吉郎兵衛) が海外進出をきっかけ設立した会社である。ニューヨーク・北京等に支店や出張所をもち、1913 (大正 2) 年の清朝恭親王コレクションオークション等により欧米で東アジア美術商として名をはせた。このようなことから先行研究では「東アジア文物を欧米や日本に紹介・販売・展示」したことに注目されてきた。しかし、本研究では、山中商会に日本国内で松方幸次郎コレクションの展示販売や洋式家具生産・輸出の実績、ペルシア美術工芸品の取り扱い等があったことも踏まえ、同社が西洋やその他の (東アジア以外の) 地域から日本へもたらした美術工芸品やそれにまつわる活動に着目する。

山中商会による展覧会事業

社長山中定次郎の欧州歴訪後の 1923 (大正 12) 年、山中商会は東アジアやそれ以外の国・地域的美術工芸品を集めた展覧会 (正確には展示販売会) を国内で開始した。1923 (大正 12) 年「古代支那美術展観」に始まり、1943 (昭和 18) 年「古備前焼展」まで年に 1~2 回のペースで開催した。基

本的には中国・朝鮮・日本の美術工芸品が中心であったが、それと並び、もしくは展示の一部として中国・朝鮮・日本以外の国・地域的美術品が出品されていた。

出品されたのは西洋 (イギリス、フランス、スペイン、イタリア)、(古代) エジプト、(古代) ギリシャ、ペルシア、インド、アフリカ、「土耳古」、「アフガニスタン、中央アジア」、「西藏」「蒙古」「暹馬」「瓜哇」「東甬塞」「老撾」「高架索」等の国・地域的美術品であり、家具や文房具、陶磁器・織物等の工芸品が中心である。

『美術工芸品展覧会——欧米最新考案——』について

このようななか、山中商会主催の展覧会で (青樹社と共催の松方幸次郎コレクション展示販売会を除き) ほほ唯一西洋美術主体の展覧会として開催されたのが、「美術工芸品展覧会——欧米最新考案——」である。1928 (昭和 3) 年 10 月 6 日~8 日に、大阪美術クラブで開催された。同展については岡部・金内 (2021) でその概要が紹介されているが、今回山中商会所蔵カタログの調査の結果、価格の書き入れを確認した。

カタログの掲載内容は次の通りである。

(1) 序文。山中定次郎、稲畑勝太郎、久米桂一郎、田邊孝次

(2) 筆者不詳「欧米最新の工芸美術——主として仏蘭西に就て」

(3) 出品作品写真。巻末の作品リストによる番号がついているのは 1113 点 (番号無の出品

物も存在), うち写真掲載は 229 点。価格は写真の傍に書き入れられたため, 写真掲載のもののみの価格が判明する。

- ・「佛国彫刻」: 番号 1~98 (*79 番は作品写真と巻末リストの記載が一致しない) = 98 点 (99 点)。この項目のみ作者の肖像写真・作者略歴が付く。
- ・「英国水彩画」: 番号 99~118 = 20 点。
- ・「陶器」: 番号 119~167 = 49 点。「ヂヤン・マヨドン氏 (Jean Mayodon)」のみ肖像写真・略歴あり。
- ・「工芸品」: 番号 168~1112 = 945 点。
- ・「於米国加工品」: 番号無しのため出品総数不明。山中商会米支店での取扱 (加工) 品。
- ・「於米へ輸出自邦製品」: 番号無しのため出品総数不明。

このうち彫刻のみ作品のサイズ (高さ) の記載がある。一番高い作品は 3 尺 3 寸 2 分 (約 101cm) 「番号 3: ベルナル (ジヨセフ)・梳づる裸婦」で, 2 尺 (約 61cm) 以上の作品は 4 点のみ, 1 尺以上 2 尺未満は 24 点。

価格では, 最高値は「番号 1: プウルデル・弓引くヘラクレス」の 8500 円で, 最安値は 15 円であった。なお 1 千円以上のものは 25 点ですべて彫刻, 100 円以上 1000 円未満は 101 点, 100 円未満は 72 点と, 多くは 1 千円未満であった。

富田 (1998) がまとめた山中商会の中国文物の展覧会での価格の例と比較する。1932 (昭和 7) 年『世界古美術展覧会』をはじめとする東洋美術展では, 最高価格は古銅器最高価格 6~10 万円, 天竜山将来品 15 万円など, 数万から 10 万円以上の作品が出品されていた。主要な価格帯は 1 千~数千円台やそれ以下であるも, 売却総額でみれば相応の規模であったと指摘している。それらに比べれば『美術工芸品展覧会』の価格は相対的に安価であったといえる。

一方, 同時代の西洋美術品ではどうか。1934 (昭和 9) 年『松方氏蒐集欧州絵画展』 (主催: 青

樹社) には絵画 111 点, 版画 107 点 (+番外 1 点), 彫刻及家具 10 点が出品され, 最高価格はローザ《戦陣》15 万円, 最低価格はカルポー《肖像》の 70 円だった。10 万円以上の作品は 2 点のみ, 1 万円以上 10 万円未満は 12 点, 1 千円以上 1 万円未満は 41 点, 100 円以上 1 千円未満は 91 点, 100 円未満は 68 点と, 1 千円未満のものが約 4 分の 3 を占める。中心となる価格帯は『美術工芸品展覧会』と大きな差はないと考えられる。

まとめ

山中商会にとっては価格の面, 質・量の面からも東アジアとそれ以外の地域の美術工芸品ではかなりの差があったと言わざるをえない。それは当時日本にもたらされた・日本人が入手しえた西洋美術の質や量, 価格の限界を押し量る一つの材料となるだろう。また, 絵画・彫刻よりも家具や工芸品の展示が多い。山中商会は独・仏美術工芸品の取り扱いによる受章歴もあることから, 西洋の工芸品とその産地・ブランド (セーブル, ロイヤルコペンハーゲン, ダンヒル, ティファニー等) の日本への紹介という点でも注目され, そのような活動の一端を今回の調査により明らかにできた。

(本発表は JSPS 科研費 (22KJ2591) の助成を受けたものです。また, 調査その他に対する山中商会様の御協力に感謝いたします。)

〔主要参考文献〕

- 岡部昌幸・金内俊樹「山中商会『美術工芸品展覧会: 欧米最新考案』図録 (1928 年 10 月 6~8 日) について」『帝京史学』36, 2021 年
- 朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』新潮社, 2011 年
- 故山中定次郎翁伝編纂会編『山中定次郎伝』1939 年
- 富田昇「山中商会展観目録研究——日本篇——」『陶説』538 号~543 号, 1998 年
- 宮崎克己『西洋絵画の到来』日本経済新聞出版社, 2007 年